

斧・鏡・玉

——オルメカの三種の宝器をめぐる一考察——

狩野千秋

はじめに

オルメカ文化の本拠地にあるラ・ベнта (La Venta) は、特殊な祭祀遺跡として、ある時期、研究者の関心を集めたが、その後、石油開発事業の推進により、重要な遺構、遺物は他の場所に移管され、発掘調査も中断されて、さまざまな未解決な問題をかかえたまま今日に及んでいる。

本稿では、この遺跡の調査で最も注目を浴びた蛇紋岩による敷石遺構と特殊な型の配石遺構をとりあげ、また出土資料のうち、斧、鏡、玉の三種を対象として、それらのもつ意味、性格、機能について考察することにする。

個々の資料に関する一般的な記述は、すでに報告書においてなされているので、詳しい紹介はさげ、主に上記の三種の器物の組み合わせに重点をおいて、メソアメリカに於ける古代の宗教祭祀とシンボリズムの観点から究明することを試みたい。

I ラ・ベнтаの特殊遺構

ラ・ベнтаの遺跡はメキシコのベラクルス州とタバスコ州の境界地域を流れるトナラ川 (Tonalá) に沿って、海岸低地から約 20km ほど内陸に入ったところの湿地帯に浮かぶ孤島で、高さ約 12m、面積約 5.2km² ほどの乾燥した台地の上に建設されている。

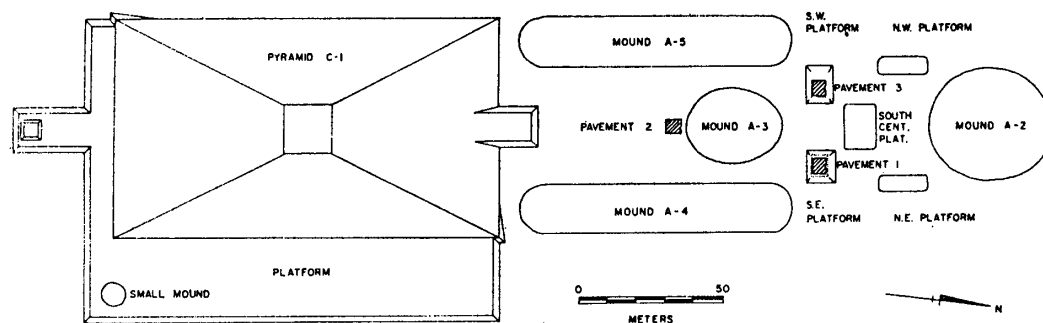


図1 ラ・ベнтаの遺跡平面図 (Coe 1956, Fig 2)

遺跡の主要部は東西約150m、南北約750mと細長く延びる区域で、南側にはピラミッドC—1と呼ばれる截頭ピラミッド型構築物（基底部138×79m、高さ36m）があり、また北側には Complex—Aと呼ばれ、墳墓を含む低い円形のマウンドや基壇を伴う祭祀広場がある。これらの構築物を結ぶ南北の中心軸に沿って、矩形や方形のプラットフォームが東西の対称的な位置に設けられている（図1参照）。

発掘調査の結果、本遺跡には玄武岩の石柱で囲んだ豪華な墳墓や巨岩をくり抜いて製作された石棺、また神話・伝承をテーマとする石碑や祭壇、そのほか石斧、珠玉、管玉、ペンダント、ヒスイの仮面、鉄鉱石の鏡、石偶、土器その他祭祀用具を、含む総計数万点にのぼる遺物が発見された（Drucker 1952; Drucker, Heizer and Squier 1959）。

とりわけ蛇紋岩の切石数百個を敷き並べて構成された、モザイク状の敷石遺構やヒスイの石斧を十字型に配置した特殊な遺構は、他の遺跡に類例をみない特別な性格をもつもので、さらに後者の場合は、石斧のほかに、鏡や珠玉、管玉などの玉類を伴うことが多く、しかもそれら三種の器物は、常に特別な組み合わせをもって埋納されており、この点から大いに関心がひきつけられた。

そこで先ず、特殊遺構と遺物について一通りその概要を説明し、次に個々の資料に関する知見を述べ、最後に、マヤの“三つ組のシンボル”と比較し、宗教祭祀の観点から、斧、鏡、玉の三種の器物の有する意味、性格、機能について考察することにした。

1) モザイク状敷石遺構

蛇紋岩の切石を敷き詰めて様式化されたジャガーの顔面を表現した敷石遺構で、合計三箇所のものが発見されている。一つは Mound A—3 の南端に設けられたもので PAVEMENT No. 2 と呼ばれている（Drucker 1952, p. 75, fig. 24）。他の二つは北側にある祭祀広場の南東部と南西部の露台（祭壇）の下に設けられていたもので、それぞれ PAVEMENT No. 1（Drucker 1952, pp. 56—59, fig. 20）と No. 3 と呼ばれている（図2—1）。このほかに Mound A—2 の墳墓近くの下層（MASSIVE OFFERING No. 2）と祭祀広場の中央部下層（MASSIVE OFFERING No. 3）の二箇所からも蛇紋岩の敷石遺構がみつまっている（Drucker et. al. 1959, pp. 128—133, figs. 9—12, pls. 20—22）。しかし、これらは完掘されなかったもので、具体的な形状については明らかではない。この種の敷石は後述する十字型配石遺構とも密接な関連性があるので、一例をあげて説明しておきたい。

PAVEMENT No. 3（Drucker, et. al. 1959, pp. 78—101, figs. 26—29, pls. 14—19。この報告書では MASSIVE OFFERING No. 1 と命名されている）。祭祀広場の南西隅の露台の下層約1.5mの箇所に設けられていたもので、モザイクの敷石面の広さは東西4.7×南北6.3mである。485個の蛇紋岩の切石によって構成され、典型的なオルメカ様式のジャガーの仮面が形造られている。頭部にはV字型の切り込みがあり、これはジャガーあるいはジャガー人間の聖性を象徴するものと見做されている。眼は上下二段に分けて四箇所設けられ、上段は三列の切石を重ねて最上部に二個

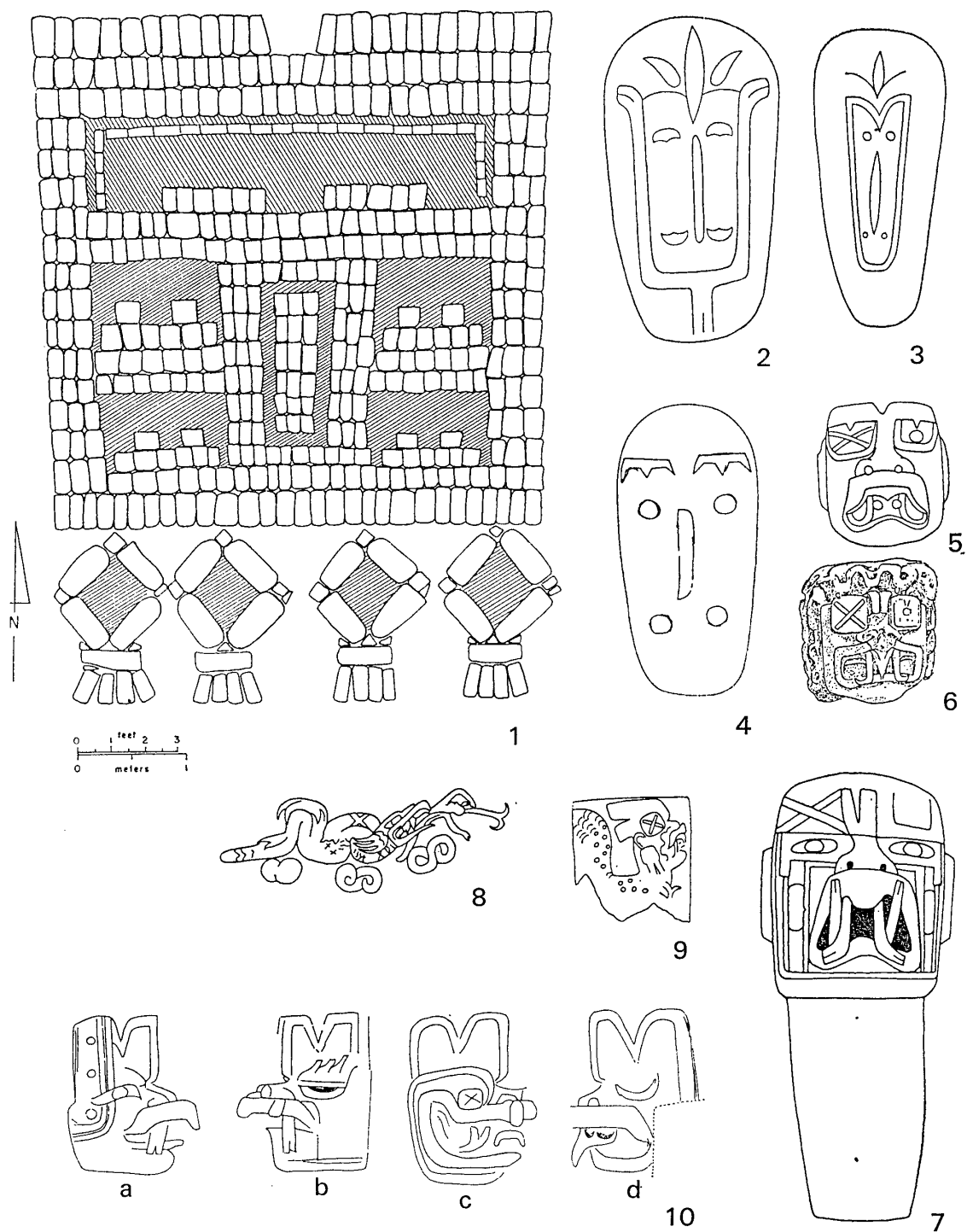


図2 1. ラ・ベント敷石遺構 No.3 (Drucker et al. 1959, Fig. 29) 7. オルメカの石斧 (Idem, Fig. 167)
 2,3. 石斧の線刻画 (Drucker 1952, Figs. 47—b. C) 8. オルメカの浮彫り (Idem, Fig. 244)
 4. 石斧の線刻画 (Drucker et al. 1959, Fig. 35—C) 9. オルメカの石碑 (Idem, Fig. 8)
 5. オルメカの仮面 (Joralemon 1971, Fig. 153) 10. ラスリマスの四神像 (Coe 1972, Fig. 3)
 6. オルメカの石頭像 (Idem, Fig. 125)

の切石を置き、また下段は二列の切石と二個の切石によってそれぞれ表現されている。また歯牙は四個の切石を菱形に組み、さらに垂れ飾り状の歯も四というように、しきりに四という数が強調されている。

ジャガーの顔面のうち、切石の敷かれている部分をみると、額の箇所には厚く赤色粘土が、また眼、鼻、それに頭部の切り込みの箇所にはそれぞれ黄色粘土が張られていた。そして敷石遺構の全体は厚さ約 30cm ほどの非常に粘稠度の強い黄味を帯びたオリーブ色の粘土でおおわれ、恰もこの部厚い粘土の層の中に敷石が埋め込まれたような状態を呈していたと報告されている (Idem, p. 93)。

モザイク状敷石遺構の下には、やはり蛇紋岩の切石を 28 層も積み重ねて、基壇状の構築物が設けられていた (Idem, pp. 95—97, fig. 27, pl. 18)。大きさは東西 12.5 × 南北 9 × 高さ 5.3m ほどの規模で、石積みの容積は約 20,500 立方フィート、重量は 1,000 トンを超えると推計されている (Idem, p. 97)。硬玉や蛇紋岩はこの遺跡が立地するメキシコ湾岸の低地平野には産出しないので、構築資材はどこか遠隔の地から運搬されてきたにちがいない。また普通はモザイクの敷石を支えるのに、これほど大量の石塊の層を積み上げて堅牢な土台を築く必要もなかったはずで、これらの点を考えあわせると、この種の遺構は単なる敷石装飾ではなく、やはり本遺跡の宗教祭祀と関係のある特別な奉納施設であったと推定される。

PAVEMENT No. 1 は上述の No. 3 の東隣りに位置し、やはり露台の下に設けられ、デザイン、構築法や埋納状態もほぼ等しい。したがって両者は東西という左右対称の位置に配置されているわけで、やはりこの点にも重要な意味のあることが暗示されている。他方、No. 2 は若干、遺存度の悪い箇所もあるが、やはり頭部に切り込みをもち、眼も四つ配置されていてジャガー神の特性を具えている。ただし鼻の表現その他、細部の点で異なり、また歯牙を欠いているのは特殊な意味を表わしているのかもしれない (Drucker 1952, p. 75, fig. 24 pl. 16)。

2) 十字型配石遺構

ラ・ベンタでは墳墓以外にも堆積土層中に石斧や鏡、珠玉類を含む特殊な埋納遺構が発見されたが、なかでも十字型の配置には、特別な意味が付与されたものと解釈されるので、主なものを選択して説明することにする。

遺構 1942—C (Drucker 1952, p. 27, fig. 10—b)。

遺跡の北端に設けられた玄武岩の石柱墳墓付近の堆積土層中から発見された埋納遺構で、硬玉製の 37 個の石斧が十字型に配置されていた。石斧は東西南北の四つの位置に分けられ、北には 17 個を 4 列に分けて置き、うち 2 個は刃先を土中に埋めて直立した形をとっていた。南には 5 個を 1 列に、東と西にはそれぞれ 4～5 個と 3 個を 2 列に配してあった。遺構全体はきめの細かいオリーブ色の厚い良質粘土でおおわれていた。下層からは蛇紋岩の敷石遺構 (MASSIVE OFFERING No. 2) が発見されている。

遺構 1943—E (Drucker 1952, pp. 55—56, 164; pl. 8)

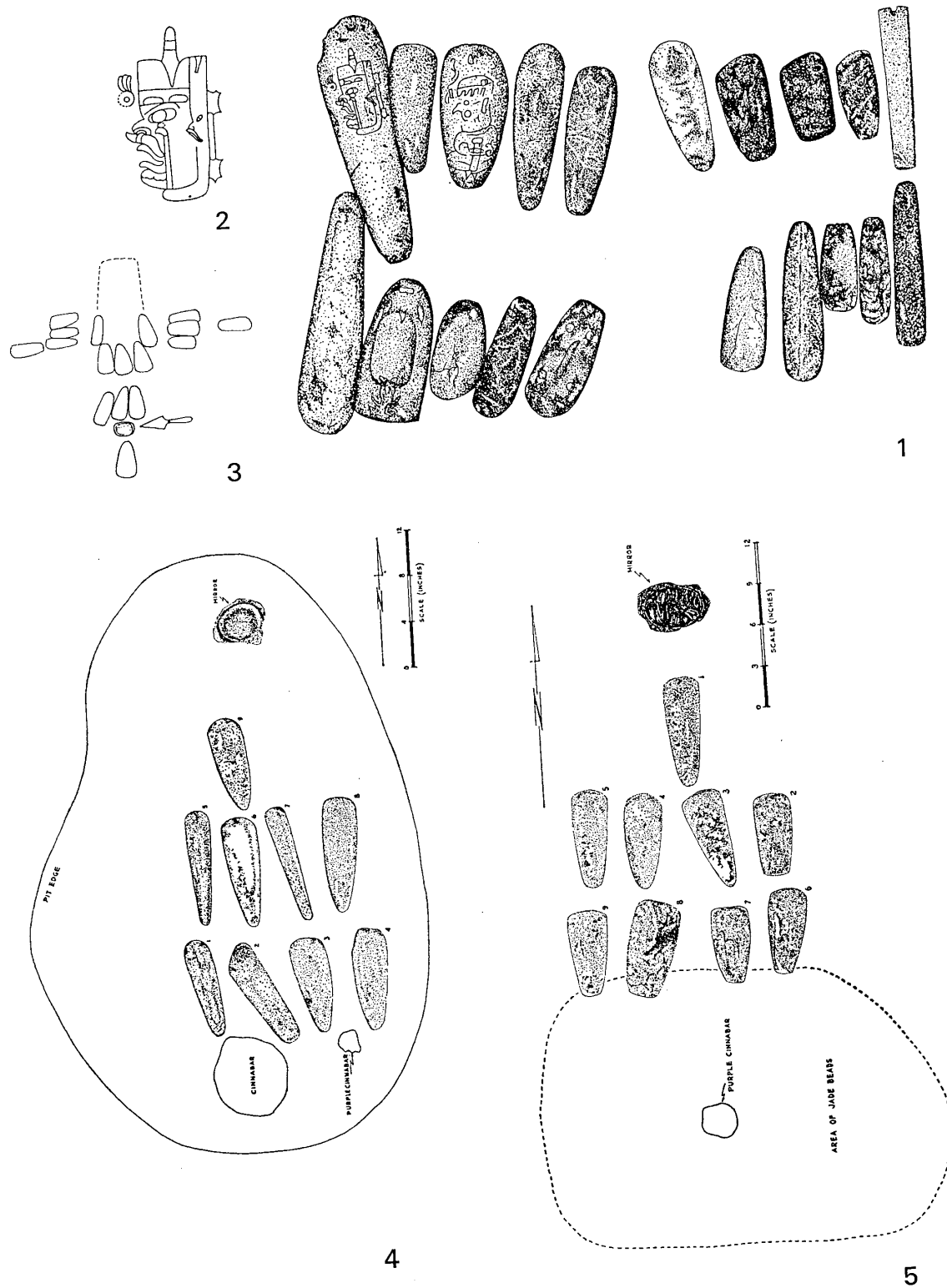


図3 ラ・ベンタの石斧配石遺構

- | | |
|--|---|
| 1. ラ・ベンタ埋納遺構2号 (Druker et al. 1959, fig. 34) | 4. ラ・ベンタの遺構9号 (Druker et al. 1959, fig. 47) |
| 2. 石斧の線刻画 (Idem, fig. 35-e) | 5. ラ・ベンタの遺構11号 (Idem, fig. 48) |
| 3. ラ・ベンタの遺構 1943-E (Coe 1972, fig. 7) | |

祭祀広場を囲む南東部の露台の下層に設けられたもので、砂質粘土で固められた箇所に硬玉製3個、蛇紋岩製17個、計20個の石斧が十字型に置かれていた。広さは南北約1.1×東西約1.2mの範囲にわたっている。十字型のタテ軸は南北方向をとり、石斧の刃先は北を指している。また石斧は北側からそれぞれ1—3—3—2個の順で4列に配置され、1列と2列目の間には赤鉄鉱の凹面鏡（長径8.8×短径6.0×厚さ0.5cm）1面が置かれていた。南側の2個の大型石斧の間にも、もとは辰砂でおおわれた木製円盤が置かれてあったらしく、その炭化した木質材の痕跡が認められている。ヨコ軸はそれぞれ東西の方向に刃先を向け、中型から小型の石斧3個と大型の石斧1個が配置されていた（図3—3）

この石斧の埋納遺構の下層約3mの地点から、先述したジャガーのモザイク敷石（PAVEMENT No. 1）が発見されたのであった。つまり祭祀広場の南東部露台の下層には、石斧の十字型配石遺構とジャガーの敷石遺構が二つ重層する形で埋納されていたわけである。

遺構9号, 11号 (Drucker, et. al. 1959, pp. 176—179, fig. 47, 48)

両者は明らかに一対をなす遺構で、南北にのびる中心軸をはさんで東西に約2.5mの間隔をおいて左右対称の位置に設けられ、また配石の仕方、内容の点でも等しい（図3—4.5）。場所は先述の蛇紋岩のモザイク状敷石遺構（MASIVE OFFERING No. 2）の上層部にあった。それぞれの遺構には、凹面鏡1点（9号は磁鉄鉱、11号はチタン鉄鉱）とヒスイと蛇紋岩の石斧が各9点ずつ含まれていた。石斧は4個を2列に配し、1個は南側の末端に置いてある。刃先はすべて長軸に沿って北方向を指していた。遺構の南端の箇所には、辰砂の塊や細片を含む粘土が敷かれ、その上に多数のヒスイの珠玉が恰もまき散らされたかのように散乱していた。9号には895個の完形品と12個の破損した珠玉が、また11号には1,180個の完形品と94個の断片が発見された。遺構の大きさは、両者ともだいたい東西85×南北120cmほどであった。

遺構はいずれも深さ13cmほどの浅いピット状をなし、砂状の堆積層を掘りくぼめて、底はオリブ色と黄色の厚い粘土（約30cm）で固められていた。

この遺構で興味ある点は、東・西の位置に設けられていることと、それぞれ鏡を含むこと、また9の数は冥界をあらわすことなどである。この遺構の北側には墳墓がある。とするとこれは被葬者に捧げられた特別な奉納施設であったかもしれない。

遺構10号 (Drucker, et. al. 1959, pp. 185—166, fig. 51)

位置はやはり遺跡の中心線上にあって、敷石遺構（MASSIVE OFFERING No. 3）の上層部にあたる。この遺構はヒスイと蛇紋岩の石斧38個で構成され、全体は十字型をなしている。石斧はすべて刃先を北に向け、また長軸は南北方向をとっている。

この遺構でもやはり南端の箇所は、辰砂の塊りや顔料を含む深紅色の粘土で固められていた。石斧はそれとは別の赤色粘土を張った特別の床面の上に敷き並べられて、さらにその上は砂質の黄色粘土で固められてあった。

埋納遺構9, 10, 11号の場合も下層には蛇紋岩の敷石遺構があり、やはり、両者は密接な関係に

あることが確認されている。

Ⅱ 出土資料

以上、ラ・ベントに於ける特殊な埋納遺構について説明したが、ジャガーの敷石と石斧の十字型配置には密接な関連性のあることが窺われ、またさらに配石遺構には石斧のほかに鏡や玉類を伴う例が多い。この三種の器物は本遺跡の祭祀場の内庭を中心とする区域や墳墓の中に限定されていて、他の場所からは出土しない点を考慮すると、やはり特別な意味があったと考えざるを得ない。そこでこの三種の器物に焦点をあてて、論議をすすめていきたいと考えるが、そのまえに出土資料の概要を説明しておきたい。

1) 玉 類

ラ・ベントでは墳墓や埋納遺構から可成りの量の玉類が発見された。その内訳は珠玉 1,477 点、管玉 636 点、耳飾り 20 点、ペンダント 12 点、小型仮面 4 点、円盤 33 点、石偶 25 点、スパンコールその他の飾り物約 160 点、となっている (Drucker, Heizer and Squire 1959, Appendix I, pp. 272—275)。珠玉は半球形が多く、直径約 0.8~1.9cm 位で、両端二方向から穿孔されている。全面はみごとに磨研されているが、石材の質は石斧にくらべると劣るようである。管玉は平均の長さ 3.3cm、直径 0.6cm 位で、擦切りおよび撃打によって原石から分割、剥離が行なわれ、内外とも磨研されている。穿孔はやはり二方向のものが多し。

耳飾りは糸巻き型、耳栓型で直径 4~5cm で、小型の棒状の付属飾りがある。なかにジャガーとヘビの図柄を陰刻したものもある。ペンダントにはジャガーの牙を彫刻したものが一對出土しており興味をひかれた。

石偶は墳墓から男・女の座像がみつがっている。とくに女子の像は高さ 8.5cm で全体に部厚く朱が塗られており、また首に赤鉄鉱の小型鏡を吊るしている。これは鏡の用途を知る上で貴重な資料となっている。また遺跡北端にある玄武岩の墓の下層から、16 個の男子立像が発見された。高さ 15~17cm。これは当時の儀式か会議の様子を再現するかのよう特別に配置されていた。人物は下帯をしめ、頭部は人工的な頭蓋変形が施されている。このほか直径 3cm 位の様式化されたジャガーの顔をかたどった小型の仮面がある (Drucker 1952, pp. 152—166, pls. 46—54; Drucker, Heizer and Squire 1959, pp. 152—174, figs. 38, 43—45, pls. 26—40)。

2) 鏡

これについてはすでに拙稿 (1982) に述べたので、簡単に記すことにする。ラ・ベントでは合計 7 点の鏡が出土した。いずれも鉄鉱石製で、うち磁鉄鉱 3 点、チタン鉄鉱 3 点、赤鉄鉱 1 点となっている。形態は円形または長円形で、寸法は大きいもので長径 117mm、小さなものは 43mm、厚さは平均 6mm 位である。鏡面の中央部は凹面状に浅く磨かれて光沢をもつ。周縁には 2 個ないし

4個の孔が穿たれている。鉄鉱石の原産地はこの地方の南部の花崗岩地帯の鉄脈中にあると推定されている。先の女性石偶には実際の赤鉄鉱の鏡が吊されており、それは神官とか高位の人物の装身具や権威の象徴として鏡が身につけられたことを示している。また実験によって凹面鏡は火をおこすことも可能であり、発火器として用いられたとも考えられる。

3) 石 斧

ラ・ベンタでは石斧はとくに先述した特殊な埋納遺構からの出土例が多く、総数はおよそ550点にのぼる。そのうち硬玉は160点、蛇紋岩は390点ぐらいの割合を示している。1943-Nという遺構からは253点の蛇紋岩の石斧がまとまって発見され (Drucker 1952, pp. 75—76)、やはりオルメカに於て石斧は特別な意味をもつ器物であることを物語っている。先に紹介したモザイク状の敷石遺構の切石も完形品ではないけれども、形態的には石斧に類似し、またすべて青緑色の蛇紋岩を使用しているところをみると、実質的には硬玉の石斧と同等の価値をもつものと見做し得るであろう。一つのモザイク装飾に平均450点の切石が用いられたとして計算しても、全部で2,000点以上になる。さらに敷石を支える基壇の切石の数を加えると膨大な量の蛇紋岩が利用されていたことがわかる。

ラ・ベンタの石斧には完形品と未成品とがあり、また形や寸法にも種々のものがある (Drucker 1952, p. 164)。形態的には長円形と矩形の2種に大別できるが、頂部が尖ったもの、丸味のあるもの、四角いものなど可成りの変化がある。大きさは長さ7~35cm、幅3~10cm、厚さ2~5cm位の範囲にわたっている。刃部の断面は大体に於て楕円形をなすが、なかにはカマボコ型を呈し、手斧に類するものもある。また寸法が短く、断面が角型で厚味があり、かつ両端が尖ったものがあり、これは槌とか丸のみとして用いられた可能性がある。反対に細長く極端に扁平なクサビ型の斧もある。

大半の石斧は大きな石片から擦切り技法によって切断されたらしく、とくに蛇紋岩の矩形の石斧にはその痕跡が認められる。硬玉製のものはすべて全面はみごとに磨き上げられている。また可成りの量の石斧が、河川の漂石を用いて製作されているようである。ところで、この種の石斧は従来、実用品ではなく、儀式用に製作されたものと考えられていた。しかし報告書の所見によると、刃部に沿って使用のあとを示す擦痕をもち、また頂部にも撃打を加えた痕跡のある石斧が、可成りのパーセンテージを占めているといわれる (Drucker, Heizer and Squier 1959, p. 139)。たとえば、OFFERING No. 2の遺構から出た図像を刻んだ大型の石斧 (図3-1) は凝灰岩製であるが、刃部には激しく使用した痕跡があり、一部は破損している。また頭部は何回も強打を受けて変形している。ラ・ベンタの発掘を担当した Drucker は、仮りに儀式用に製作されたとしても、たとえば祭儀に際して火を得るために、樹木を伐採するのに石斧を用いた可能性はあると指摘している (ibid.)。筆者もこの意見には同感で、とくにラ・ベンタで石斧が鏡を共伴していることは、その事実を裏付けるものと判断される。この点については後に考察することにした。

上述した OFFERING No. 2 には51点の石斧が埋納されており、そのうちの5点には線刻画が

描かれていた。先の使用痕のある石斧の図像では頭部の亀裂の箇所から植物の穂のようなものが上部へのびており、それはトウモロコシの神像を表現したものと見做されている(図3-2)。このほか興味ある図形としては、中心に棒状のものを置き、その両側に4点を配したデザインで、これは明らかに敷石遺構のジャガーの顔面を抽象化したものである(図2-4)。これとよく似たデザインは十字型配石遺構の石斧の中にも認められる(図2-2, 3)。後者の場合にはV字型の切り込みの箇所からトウモロコシが生育している。この系統の図案はさらに抽象化されて、オルメカのイコノグラフィではさまざまな文脈に出現している。サイコロの五の形に似た五つ目型のシンボルはその最も簡略化された記号である。テオティワカンでは太古の火の神のシンボルとなっていた(狩野 1983, p. 245, 図12参照)。

Ⅲ ヒスイのシンボリズム

ラ・ベントでは石斧や装身具類を合わせると総数2,400点にのぼる硬玉製品が出土している。玉類は古代のメソアメリカに於ては一般に墳墓の副葬品とか、高貴な人物の身体ないし衣裳を飾る装身具として用いられていたが、それは素材の優美さや稀少性のほかにも、呪的、宝器的意義を有し、金・銀にもまさる特別な宝石として最高の価値がおかれていたからである。

新大陸の土着民が何時ごろから硬玉類に目を向け、原石を採取し、加工技術を身につけるようになったのか、確実なことはわかっていないが、メキシコでは中央高原地帯の形成期の初期に属するトラティルコ(Tlatilco)、サカテンコ(Zacatenco)、エル・アルボリージョ(El Arbolillo)などからは小数ながら石斧、珠玉、耳飾り、ペンダントなどが発見されている(Vaillant 1930, 1934, 1935)。トラティルコではジャガーの牙を形どったヒスイ製品が死者の口中からみついている(Stirling 1964, p. 44)。トラティルコの資料の中には1500B.C.という古い年代をもつものもある(Libby 1952; Foshag 1955, p. 80)。このほかグアテマラのペテン地域のセイバル(Seibal)やカミナルフユ(Kaminaljuyú)の形成期に属する墳墓からも出土例がある(Proskouriakoff 1974, pp. 10-11; Shook and Kidder 1952, p. 113)。

他方、オルメカ文化に於ては、前期のサン・ロレンソ(San Lorenzo)相に硬玉製品はなく、中期のラ・ベントの時代(900-400B.C; Drucker et al. 1959, pp. 265-267)になってはじめて登場する。しかしこの時代にはすでに原材の分割、剥離、穿孔、磨研など高度の技術の発達が見られる(Drucker 1952, pp. 153-166)、背後に長い加工技術の伝統の存在したことが窺われる。

メソアメリカの硬玉は本質的には硅酸塩ナトリウム・アルミニウム($\text{NaAlSi}_2\text{O}_6$)で輝石(pyroxene)として分類されている。比重は3.30-3.36、硬度は7で純粋な状態で発見されることは稀で、実際には可成り量の錐輝石または透輝石を含有している。さらに曹長石や白雲母、石英その他、石の外観や鉱物的特性を変える物質も含まれているようである(Foshag 1954; Rands 1965, p. 561; Proskouriakoff 1974, p. 1)。

Foshag はメソアメリカの硬玉を3種に分類している(Foshag 1955, p. 81)。最高の品種は淡黄

緑色 (apple-green) またはエメラルド・グリーンを呈するもので、一般に白色または灰色の斑点を伴い、外見的にはビルマ産の硬玉類と類似している。

第2のものは組成は緻密な硬玉であるが、色調は青味を帯びた淡灰色から青灰色、緑灰色あるいは青緑色、さらに暗緑色と多種にわたっている。オルメカの作品は主にこれらの硬玉を素材として製作されており、地域的にも可成り限定されているようである。

第3のものは、表面が粗粒質で、淡灰緑色または黄緑色を呈する硬玉で、マヤ地域の小型彫像に多く用いられていると指摘されている。

オルメカの硬玉の原産地については、目下、同定作業が進行中ではっきりとつかめてはいないけれども、メキシコのゲレーロ州 (Guerrero) からモレーロス州 (Morelos) にかけての山岳地方に鉱脈があると推定され、当時の交易組織によってオルメカ地域へ運ばれたと考えられている (Grove 1974, pp. 124—125; Porter W. 1981, pp. 107—112)。産地と交易の関係は極めて重要なテーマではあるが、本稿の主題からは若干それるので、別の機会に改めて論じることにした。

ところで、オルメカ人が硬玉に対してどのような観念を抱いていたかについては、実際の記録文書がないので専ら物質資料を通じて推測するしかないが、しかしマヤ人やアステカ人については絵文書類や各種の芸術作品が残されており、またスペイン人の見聞記録もあるので、参考に供することができる。

Sahagun は 16 世紀の征服当時に於てもアステカ人の間では硬玉は非常に珍重されていてナワトル語によって 5 種類のものが区別されていたと述べている (Sahagun 1950—63, book 11, p. 226)。最も一般的な玉はチャルチウィトル (Chalchihuitl) で「緑の宝石」を意味した。次はケツァリツトリ (Quetzalitzli) と呼ばれ極楽鳥の羽根に似た透明なエメラルド・グリーンを呈するもので最高の硬玉と見做された^①。このほかイスタクチャルチウィトル (Iztacchalchihuitl) = 透輝石、トリラヨティク (Tlilayotic) = 緑輝石、それにもう一つ別のチャルチウィトル (Chalchihuitl) = 曹長石があった。

Sahagun はチャルチウィトルは貴族の標章であって一般民は身につけることが禁じられていたとも述べている。また Landa もマヤ人の中で硬玉は首長の地位、身分の表象であったとしている。彼は「マヤ人は交易に多大な関心を抱いていて、塩、衣類、奴隷などをウルワやタバスコ地方へと運び、カカオや石の珠と交換したが、それらは (カカオや石珠) マヤ人にとって貨幣の役目を果していた。また首長たちは良質の珠玉を祝祭のときに宝石として身につけた」と述べている (Landa 1941, pp. 94—96)。

Landa が「緑色の石」として記述している場合、その石は常に重要人物に対する贈物とか神への奉納物であることが多い。また Landa はマヤ人が硬玉類を貨幣と見做していた例として、埋葬の風習をあげている。すなわち「人が死ぬと人々は経かたびらを着せ、死者の口に食糧としてトゥモロコシを、また (あの世で使う) 貨幣として玉類を口に含ませた」と述べている (Landa 1941, pp. 129—130)。

Sahagun もまたアステカに於て同一の習俗のあったことを記録している。「首長やその息子が死

ぬと、人びとは彼らの口に緑の宝石をふくませた。農民の場合には、普通の緑がかった石や黒耀石をふくませた。こうした石は死者の心臓になると信じられていた」(Sahagun 1950—63, book3, p. 43)。このように硬玉と心臓との結びつきは、実際にアステカの彫像の胸の箇所に玉類が象眼されている例のあることから裏付けられている。

硬玉そのものが物質としても神聖視されていたことは、しばしば祭祀場の埋納施設から大きな硬玉の原石が発見されていることによっても判る。カミナルフユのA—6というピラミッド型神殿では、階段の基礎のなかに恰も鎮壇具のような形で、直径 40cm, 重さ 200 ポンドもある硬玉の大石塊が埋蔵されていた (Kidder, Jennings and Shook 1946, p. 119)。またセイバルでも記念石碑の下に原石を埋納している例が数箇所みつまっている (Willey 1978, pp. 100—101)。

硬玉はまた土着民の間では薬効があると信じられていたらしく、ブラジルやアマゾン奥地の原住民はとくに腎臓病の特効薬として用いたり、あるいはヒスイの斧を護符として身につけていたといわれる。そもそも Jade という語はスペイン語の “piedra de Yjada” (胆石の石) に由来するもので、それは16世紀にスペイン人が硬玉の薬効について土着民から知識を得て、それをヨーロッパへ伝えたからだと考えられる (Proskouriakoff 1974, p. 1; Hammond et al 1977, p. 36)。

他方、メソアメリカに於て硬玉は一般に水と密接な関連性を有している。アステカでは水の女神チャルチウトリクエは “ヒスイの衣裳をつけた女神” の意であり、また太陽の正常な運行に必要な食糧はチャルチウアトル=貴重な水または “ヒスイの水” と呼ばれ、これは人間のいけにえの血を意味していた。

古典期マヤでは円と小円はヒスイのシンボルであるが、それはまた水の日ムルク (Muluc) や水の月 (Mol) の象形文字ともなっている。また暦の 360 日を表わすトゥン (Tun) の記号の要素にもなっている。Thompson の研究によると、トゥンはユカテカ語ではヒスイとか宝石を意味する言葉で、マヤ族は飢饉の時にはトゥンと呼ばれる緑の石を神に捧げたと述べられている (Thompson 1971, p. 144)。

またユカタン地方では、後古典期時代に貨幣として用いられたヒスイの珠はカン (Kan) と呼ばれ、それは成熟したトウモロコシの粒を意味していた (Thompson 1971, p. 75)。古典期の絵文書でもカンの記号からしばしばトウモロコシが生育している図があり、またトウモロコシの神の頭飾りにはカンの記号がよく付されている。したがってマヤではヒスイの珠とトウモロコシの粒とはアレゴリカルな意味で同一視されていたと見做して差し支えないと思われる。

このように古代の中米ではヒスイは死者の食糧、貨幣、トウモロコシ、人間の血液、薬など貴重な物質の代名詞であったり、また雨や水とそれを司る神とも同一視されていたようであるが、オルメカに於てもヒスイの石斧に神像を刻んだり、墳墓や特殊な遺構に玉類をおさめたりしたのは、基本的には共通の観念や習俗に由来するものと考えられる。

Ⅳ 斧神の系譜

図像を刻んだ石斧は、オルメカ地域を越えて、北はメキシコ中央高原地帯から南はエル・サルバドル、コスタ・リカ方面まで広がっており（狩野1983, pp.231—238）、また図像についてもジャガーのほかにはワニ、ヘビ、コンドルなど他の動物、鳥類の特性も部分的に混入され、またそれらにかかわるシンボルの体系も複雑化しているように見える。最近のイコノグラフィー研究によると、これまでオルメカの宗教についてはジャガー崇拜を強調しすぎるきらいがあり、ジャガーと見做されている多くの図像は、実際にはヘビ、ワニ、カイマンなどの爬虫類であるとする説や（Stocker 1980, pp.740—758）、またさらにオルメカ様式の図像分析を通じて、多数の神々を抽出し、それによってメソアメリカにおける後の時代の神々の原型は、すでにオルメカの時代に存在したとする説も提唱されている（Joralemon 1971）。

上記の説にはたしかに正当と見做し得る根拠もあり^②、また複数の神々を擁する組織立った宗教体系もすでにこのころオルメカに存在した可能性も考えられるが、少なくとも、ラ・ベンタに関する限り、あくまでジャガー神を主体とする宗教祭祀が行なわれていたと推定される。たしかに各地に分散している石斧の図像を総合すると、複数の神々の存在を肯定せざるを得ないが、しかしそれらの神々は、マヤ、アステカの時代のように、それぞれ独立した神格をもつというよりは、むしろある特定の単一神の所有している複数の属性や職能を、個別的に表現したものと受けとれる。というのは、一見したところ多種多様にみえる図像も、詳細に点検すると、系統的には同一型式の範疇内におさまるし、種々の形のシンボルも意味や機能の点では相互に関連していて、大半は二つの要素、すなわちU字型とX字型のシンボルに還元し得ると思われるからである。

他方、オルメカの図像にあらわれる動物は主にジャガー、プーマ（猫科動物）とヘビ、ワニ（爬虫類）の二種にはほぼ限定されており、U字型は前者に、X字型は後者に付随している場合が多い。とくにX字型については後の時代にあらわれるカミナルフユ（Kaminaljuyú）の“長い唇の神”や、イサパ、マヤの翼蛇神＝竜のシンボル・マークとして頻繁にあらわれるようになる（狩野 1983, p.248, pp.254—256）。

以上のことから、オルメカ時代に祀られた神は、ジャガー神を主体とするが、その神格は二元性をそなえ、動物種としては猫科と爬虫類、またシンボルとしては基本的にU字型とX字型とをもって表記され、さらにそれによって、対立する二元的要素、たとえば、火と水、太陽と月、東と西、天と地、昼と夜、男性と女性、生命と死、その他諸々の概念を象徴したものと考えられる。この場合、重要なことは、二元的要素はあくまで対立するものとして別個に存在するのではなく、単一の神に統合されているということである。この二元性をそなえた単一神という概念は、オルメカの石斧の図像にしばしばみられるところで、それは一個のジャガーの顔にU字型とX字型の二つのシンボルが同時に付されていることによってもわかるのである（図2—5～7）

ジャガー神はまた四つの局相をもっていたらしく、ラス・リマス（Las Limas）の像には両肩と

両膝にそれぞれ二つずつ別個の顔をしたジャガー神が刻まれている（図2—10, a—d）。その具体的な職能についてはよくわかっていないが、Joralemon の分類によると a はⅥ型で、春や新生の神シペ・トテック (Xipe Totec), b はⅠ型で、火神シウコオアトル (Xihucoatl), c はⅦ型で、風の神ケツァルコオアトル (Quetzalcoatl), d はⅧ型で、死神ミクトランテクゥトリ (Mictlantechutli) に相当するといわれる (Joralemon 1971, p. 43, 79, 84, 85, 90)。

先の埋納遺構に石斧を十字型に配置したものがあったが、それもやはりジャガー神の四面性を象徴したものと考えられる。メソアメリカに於て十字型はさまざまなシンボリックな意味をそなえているが、この場合は宇宙の四方向を表象していると思われる。

マヤの象形文字では、この記号はカン十字と呼ばれ、一年の最初の月の象形文字ポップ (Pop) に付随してよくあらわれ、首長とかその座である権威の象徴となっており、またその座はジャガー神とも関連性を有していた (Thompson 1971, p. 107; 狩野 1983, pp. 256—258)。

いずれにしてもオルメカのジャガー神は二元的な神格を有し、また四つの局相をもって宇宙に遍在するものと見做されていたようである。またさらにその聖性は斧によっても象徴されていたことは上述した通りである。

古来、斧を聖なる神の象徴とか、あるいは憑代と見做して宗教的な礼拝の対象とし、特別な祠堂に祀ったり、神殿に奉納したりする例は、旧大陸ではすでに数多く知られている (たとえば Zeus, Thor, Indra など)。その場合、斧は雷神としての霊格をそなえ、火と水の双方にかかわる信仰や神話のテーマとしてあらわれている。そのような信仰や神話と宗教儀礼は新大陸にも存在し、古代の石彫、絵画や絵文書類、また16世紀のスペイン人の記録などに残されている。メキシコ中央高原地帯のトラロック (Tlaloc), マヤのチャク (Chac), サポテカのコシーホ (Cocijo) などはいずれも雨神であるが、また雷神で、その神格は斧と稲妻によって象徴されていた。トラロックの図像は数本の鋭い牙と二匹の蛇に囲まれた巨大な眼に特徴があり、別名“ジャガー・蛇”とも呼ばれている。この神は太古の時代から中央高原地帯に存在したらしく、テオティワカンの有名な“ケツァルコオアトルの神殿”を飾る頭像や建物の壁画として現われている。雨神と同時に火神の属性をそなえ、神話に於ても天上から“火の雨”を降らせて世界を崩壊させたりしている。テオティワカンの



図4 トラロックの図 (Séjourné 1966, fig. 14)

フレスコ画でもトラロックの頭部には火神シウコオアトル (Xihucoatl, 火蛇) のシンボルである十字型の記号が付されている (図4)。

アステカの首都テノチティラン (Tenochtitlan) に安置されたトラロックの像は、雷光すなわち燃える炎を象徴する深紅色で塗られてあったといわれ、また右手に斧、左手にコバル

(香料)の袋をさげている。絵文書でも儀式用の装束に身をかため、ジャガーのフードをかぶり、右手に火斧、左手に蛇の形をした稲妻をたずさえている (Brotherstone 1979, pp. 102—103; Laud Screenfold pp. 1—2), (図5)。

メキシコの考古学者 Covarrubias はトラロックはオルメカのジャガー神に由来するという意見を唱えたが (Covarrubias 1957, fig. 22), 最近ではこれを否定する説もある。例えば Grove はオルメカの本拠地であるメキシコの湾岸地帯と中央高原地帯との接触の経緯を調べ、オルメカ的と非オルメカ的要素とを区別し、その結果、トラロックは本来高原地帯に発祥する固有の神であると見做した (Grove 1974, pp. 117—124)。

たしかにトラロックの像は本質的に非オルメカ的であり、また斧との関係もアステカ時代の資料を除くと、図像的にはほとんど見当らない。この点はサポテカのコシーホについてもいえる。この地方の言葉でコシーホは稲妻を、またシュー・コシーホ (xoo cocijo) は雷を意味し、最も力強い自然の偉力を象徴している。土着民はこの神を非常に崇め、しばしばいけにえを捧げた、と16世紀のスペイン人の記録に書かれている (Flannery and Marcus 1983, p. 38)^③。コシーホをあらわす図像はいろいろあり、なかにはオルメカの特徴をそなえたものもある。しかしコシーホは雷神であるにもかかわらず、斧との関係はほとんどみられない。これには恐らく何か特別な理由があるにちがいない。

上記の二神にくらべると、マヤのチャクの方が遙かに斧との結びつきは密接である。チャクという名称は、16世紀にユカタンの司教を務めたディエゴ・デ・ランダ (Diego de Landa) の“ユカタン事物記”にはじめて登場する。ランダの記録によると、チャクはトウモロコシ畑の神、穀物の神で、その祭儀は雨乞いの儀式として施行されていた。チャクは四つの局相をもち、それぞれ宇宙の四方向と固有の色に、すなわち東=赤、西=黒、南=黄、北=白に対応していた (Landa 1941, pp. 97, 137—138)。チャクの祭儀は現代でもマヤのラカンドン族 (Lacandon) やツォツィル族 (Tzotzil) その他では盛大に行なわれている (Landa 1941, p. 138, footnote 638; Thompson 1970, pp. 265—270)。

Thompson はマヤ語のスペイン語辞典であるモトゥル (Motul) を引用して、土着民はチャクを食糧の神、水神、雷神、稲妻神と見做していたとし、このことから彼はチャクを焼畑農耕の神であろうと推定している (Thompson 1970, p. 252)。またユカタン地方のユカテカ族やベリセ南部に

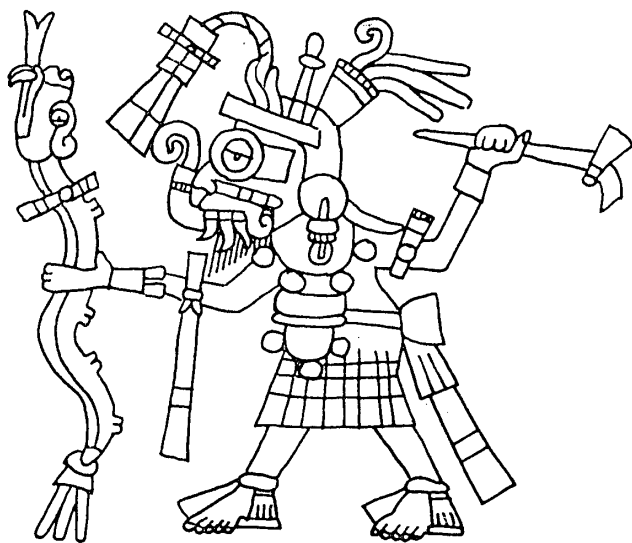


図5 トラロックの図 (Brundage 1979, p. 59)

住むモパン族 (Mopan) は焼畑耕作地の草木を切り払って清掃したとき、よく小型の磨製石斧を発見する。彼らはそうした古い時代の石斧をバアトチャク (baat chac) “チャクの石” と呼び、嵐の最中にチャクが大地へ投下した雷石であると信じているようだ (Thompson 1971, p.270; 1970, p.253)。実際に低地マヤの諸遺跡からは、非常に多数の石英の斧が発見されており、それらは刃先が欠けていたり、磨滅したりしているが、なかには砥ぎ直して使用されているものもある。Hammond によると、このような斧は長さ 30cm、重さ 500—1,000g 位で振り回すには相当の力が必要だそうである。バリセ北部のコルア (Colhua) には 4~5 平方マイルの地域にわたって、古代の石斧をつくる作業場のあとがあり、沢山の石屑にまじって 200 個以上もの未成品や捨てられた斧がみつまっている。また小型の火成岩の斧もあり、これは磨いたり、砥いだりして使用されたようである (Hammond 1982, p.151—152)。

このほかグアテマラのセイバル (Willey 1978, p.86—89) やバルトン・ラミー (Barton Ramie; Willey et al. 1965, pp. 472—476)、アルタル・デ・サクリフィシオス (Altar de Sacrificios; Willey 1972, pp.130—133) の諸遺跡からは、比較的小型の (長さ 6~15cm 位) 硬玉の石斧が発見されている。時期は形成期から古典期のものが多く、またすべて無文である。

チャクの像は、ユカタン地方のチチェン・イツァ (Chichen Itza) やウシュマル (Uxmal) など



図6 B神の木彫, ティカル出土 (Hammond 1982, p.278, Fig, 10•5)

の遺跡では、雷や稲妻、蛇などのモチーフを伴って、建物の華麗な壁面装飾を構成している。その特徴は象に似た巨大な鼻と眼の周囲に付された丸い水滴状の模様にある。これはマヤ後期のブーク様式で、中央高原文化の要素が若干、混入している。

ところで上述したチャクという呼称は、主として後古典期時代にユカタン地方に住んでいたマヤ族の間で行なわれていたもので、それ以前の古典的時代のいずれの神に該当するのか、ということ

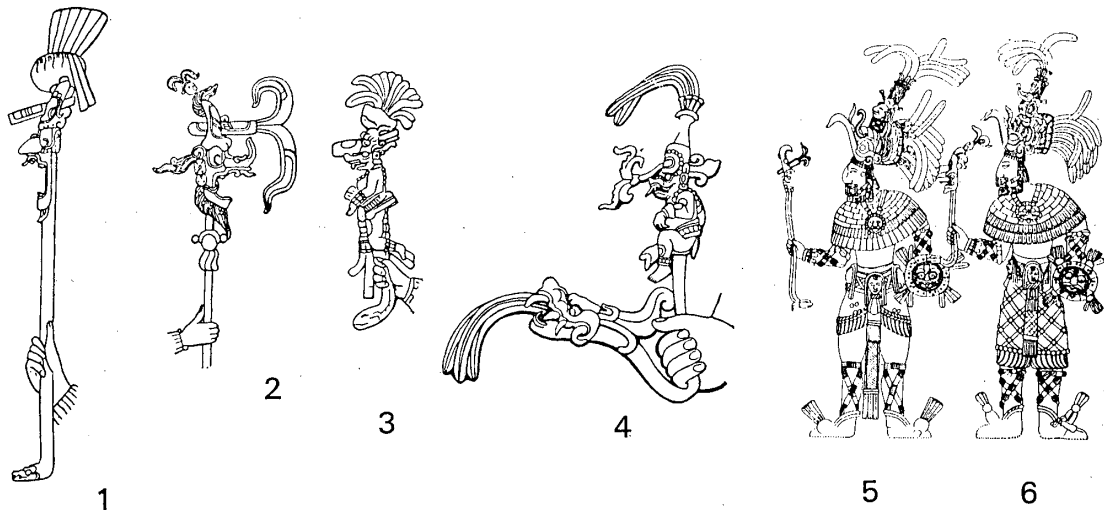


図7 笏 (マネキン・セプター)

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1. パレンケ (Spinden 1913, Fig. 51) | 4. キリグア (Idem, Fig. 47-b) |
| 2. ツェンダレス (Idem, Fig. 50) | 5. パレンケ (Ruz 1958, fig. 17) |
| 3. ヤシュチラン (Idem, Fig. 47-a) | 6. パレンケ (Idem, fig. 17) |

が当初の研究段階で問題となった。しかし、やはり鼻の特徴から現在では、Schelhas の分類(1904)によるB神、通称“長鼻の神” (Long-nosed God) に比定する意見が大勢を占めている。

古典期のB神の鼻はユカタンのチャクほど大きくはなく、日本の天狗の鼻に似ている。最近、ティカル (Tikal) の墳墓から化粧漆喰を施したB神の木彫が発見された (図6)。

この彫像では額の箇所到大形の石斧が打ち込まれたような形で突きささっている。また両手で水のシンボルであるムルクの記号をかかえている。先述したようにムルクはヒスイの記号やまたカンの十字型とも関係がある。

B神はまたマネキン・セプター (Manikin Scepter) と呼ばれる笏の形でもあらわれている。パレンケ (Palenque), ヤシュチラン (Yaxchilan), キリグア (Quirigua) の例では、やはり神像の額の箇所に斧が突きささり、さらに刃の先端からは葉状のもの、おそらくトゥモロコシの若葉か穂を様式化したと思われる模様が出ている (図7-2, 4~6)。この種の笏は常に高貴な人物が手にしており、パレンケでは宮殿や墓室の浮き彫り像となっている。Joyce はこの笏を儀式用の斧と解釈しているが (Joyce 1970 (1914), p. 236) 首長とか高級司祭の権威の標章であって、おそらく単純な斧の形から次第に豪華なものへと発達したものと考えられる。

古典期マヤの絵文書、たとえばマドリッドやドレスデン・コデックス (Madrid 33b, Dresden 30a) などには斧を手にした神の図があり (図8, 9), これもB神と見做される。また数字の



図8 B神 (マドリッド)

6に該当する頭像では眼のなかに斧が挿入されていて、これもまたB神と考えられる(Thompson 1971 p.134, figs.13—22, 24—32~37)(図10)。6の神が水とか植物生長と密接な関係をもつことは、パレンケの宮殿内、家屋Dの戸柱に描かれた水蓮の花からその頭像がのぞいていることからわかる。水蓮はマヤではやはり水のシンボルで、よく水中に浮かぶワニの頭から生えている。こうした理由から数字6の神はB神と関連のあることがわかる。

V 考 察

これまでオルメカの祭祀遺跡であるラ・ベンタの特殊遺構をとりあげて、その出土資料を検討し、古代人のそれらに対する観念や配慮について調べてきた。そこで最後にオルメカに於て神聖視されていた三種の器物の組み合わせが、如何なる意味をもつものであるのか、という点をあらためて考察することにしたい。

まず石斧についてみると、報告書の所見にもあったように、儀式用に製作されたものではあるが、なかには実際に使用された痕跡が歴然としているものがある。またそれは儀式に際して火を得るために、樹木を伐採するのに使用されたという推定もなされていた。しかし具体的に何を目的に火をたくのかは指摘されていない。筆者はそれを焼畑農耕の儀式と結びつけて解釈したい。

後古典期時代にユカタン地方では、トウモロコシにかかわる焼畑農耕の儀式が行なわれていたという記録がある(Landa 1941, p. 97, 135, 138; Long 1923, pp. 73—76; Roys 1933, p. 118; Thompson 1971, pp. 99—100)。この儀式は260日周期の祭式暦にのっとって行なわれたもので、65日を単位とする四つの期間に区分され、またそれぞれ四つの方向と色彩がふり当てられていた。そしてチャクと称する四人の火付け役が選ばれて、三人が20日ずつ交代で畑に火を燃やし、最後に一人が5日で火を消したと伝えられている。畑に火を燃やすことは、大変危険な仕事であるため、その作業は極めて慎重に行なわれ、またこの行事は支配階層の手によって執行されたといわれている。

焼畑の行事は、すでに古典期時代から行なわれていたことは、絵文書にも残されている。ドレスデン・コデックス(Dresden 42C—45C)にはやはり同じ祭式暦が同じく65日ごとに四つに区分され、同じ方向と色彩が当てられている。ここではB神が四つの相をとってあらわれ、斧を振りあげてトウモロコシの神を威かくしたり、あるいはカメラに乗ったり、別の神と対面したり、犬にまたがる姿などで描かれている。内容は理解しにくいだが、この資料を通じて、焼畑の儀式が古典期において行なわれ、その伝統はそっくり後古典期時代に至るまで保存されていたことが確実にわかるのである。そし

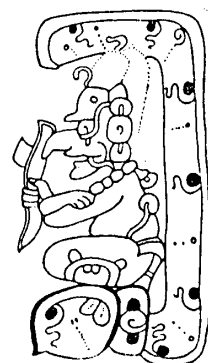


図9 B神
(ドレスデン)



図10 6の数の神

てさらにその起源はオルメカ時代にまで遡るものと推定される。

ところでこれらの諸記録には、肝心の火をどのように点火したのかまったく述べられていない。筆者はおそらく鏡を使用したのではないかと推測する。少なくともオルメカの場合は凹面鏡で直接、太陽から火をとり、それを聖火として樹木に点火したのではあるまいか、それだからこそ斧と鏡は焼畑の儀式に是非とも必要な神聖な器物として取り扱われたのであろう。

なおオルメカの石斧は全般的に小型で扁平である。実用に供されたとはいえ、熱帯の硬木を伐り倒すのは無理であって、あくまで儀礼的に、たとえばクサビのような形で樹木に打ち込むとか、あるいは小枝を切り落とすとかに使用し、実際には別の凝灰岩とか石英といった硬質で鋭利な刃をもつ斧が用いられたと考えられる。先述したように現実には古代の焼畑からそうした実用の斧がみつまっていることも、そのことを裏付ける。またB神の額に斧が打ち込まれた形で表現されているのも、儀式の実態を部分的に象徴しているのではあるまいか。

次にオルメカの三種の器物の組み合わせについて考えてみたい。再三述べたように、これらの品は特別な場所に、しかも特殊な形式で埋納されており、格別に高い配慮すなわち宝器として神聖視されていたことが窺われる。この問題を解釈するに際しても、やはりマヤの古典期時代の類例を参考に供したい。

マヤの研究者たちの間で、以前から注目されているものに“三つ組のシンボル”がある。これはX字型と葉状型と貝の断面の三種のシンボルを組み合わせたもので、Three-part Symbolとか“Triadic Symbol”と呼ばれている(図11-1~6)。Spinden (1913, p. 68)は降雨のシンボルとし、Seler (1915, p. 90)はケツェルコオアトルの標章で、X字型は火、貝は風のシンボルと見做した。またRands (1955, p. 303)は三つ組全体を流水とする説を唱えたが、近年、Kulber (1969, pp. 33-46)はこの記号の付帯箇所、構成、型式を克明に追求し、B神ともっとも密接な関係にあることを突きとめた。

彼は水の要素をしりぞけ、X字型は火、貝は火の点火をあらわし、その中間にトウモロコシの葉があるのは、焼畑農耕に関係のあるシンボルであろうと解釈した。その発想は卓抜で筆者も賛意を呈したい。しかし水のシンボルがないというのは納得しがたい。というのは焼畑は雨期の近づくの見計らって行なうもので、当然、水を必要とし期待しているからである^④。

さてオルメカの場合はどうであろうか。因みにオルメカの三種の器物をマヤの“三つ組のシンボル”に対応させてみると、斧は雷、稲妻を象徴するから、火と水の双方を兼ねることになる。ヒスイの珠玉は先のユカテカ族の例にならって、トウモロコシの粒とすることもできる。

ところで、マヤの“三つ組のシンボル”に関して、すべての研究者が見落している重要な点が一箇所ある。それは三つ組の下にあって、それを支えている別の大きな記号である。これは一般にキン(Kin)と呼ばれ、太陽をあらわすシンボルである。ときどき三つ組の記号の一つが欠けていたり、はっきりしない場合でも、キンの記号は必ず一緒に付されている。つまりこのシンボルは三つ組ではなく、四つ組と解した方が正しいのではないかと思われる。そうなれば、オルメカの鏡をそ

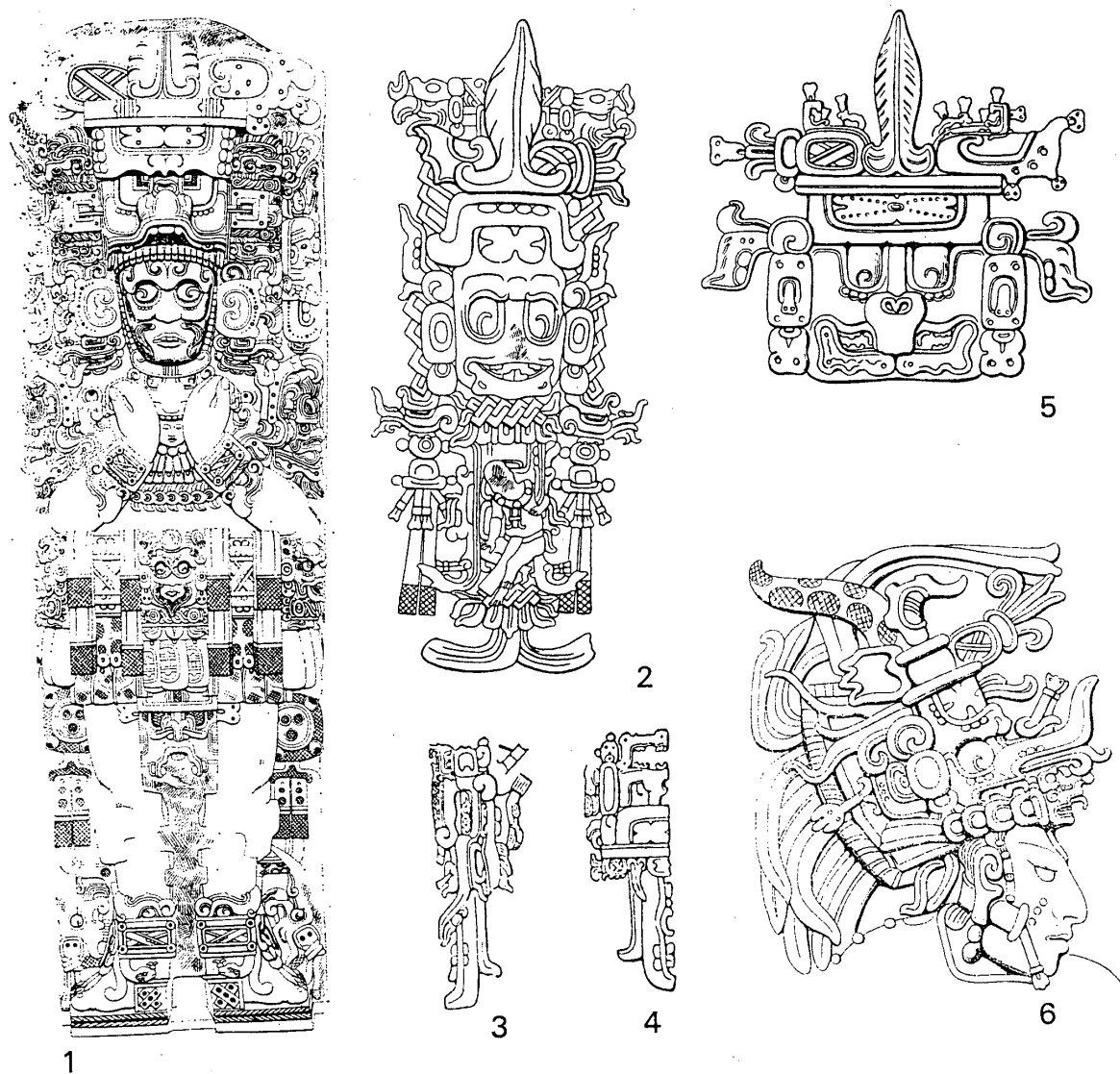


図11 マヤの“三つ組のシンボル”

- | | |
|--|--|
| 1. コパン, 石碑1号 (Maudslay 1889-1902, I, Pl. 63) | 4. ピエドラス・ネグラス, 石碑6号 (Rands 1955, p. 304) |
| 2. コパン, 石碑H号 (Idem IV, Pl. 61) | 5. パレンケ, 十字の神殿, 銘板 (Maudslay IV, pl. 76) |
| 3. ピエドラス・ネグラス, 石碑6号 (Maler 1901, Pl. XV) | 6. ヤシュチラン, 楯14号 (Idem, Pl. 93) |

こに加えることができる。鏡は太陽のシンボルだからである。ただし、四つ組ではあっても、太陽と火はシンボリックにみて重複するので、実際には火、水、トウモロコシの三種を象徴する記号と解釈できるであろう。

Kubler はさらにこの三つ組のシンボルは、ピエドラス・ネグラス (Piedras Negras)、パレンケなどマヤの大都市に於ては、王の即位や葬送儀礼を描いた記念の浮き彫り像に付随している場合が多いことに注目し、ついで支配者層との関係に目を転じている。そしてこのシンボルを身につけて

いる人物たちは、おそらくいずれも王家の系統に属する者たちで、またその地位や身分も世襲的であったにちががなく、また彼らの役職のなかには、王家の重要な行事としての焼畑農耕の儀式も含まれていたであろうから、その儀式の施行も世襲的な職務として代々、継承されていたであろうと推定している (Kubler 1969, p. 36)。

Coe もまたオルメカ人の祭祀について、Kubler と同じような意見を述べている (Coe 1972, pp. 5—11)。Coe はオルメカの器物のうち、鏡を重視し、それを媒介としてアステカのジャガー神であるテスカトリポカ (Tezcatlipoca) の祭祀を例にあげ、さらにそれをオルメカのジャガー神の祭祀にあてはめて解釈しようとしている。

彼によると、上記の二神はともに火神であって、その神格は鏡によって象徴されている。この場合、鏡は焼畑農耕ではなく、その呪術的性格からシャーマニズムと結びつけて論じられている。鏡は“万物を見透す器物”で、これによりテスカトリポカは新王の即位や神官の任命に偉大な靈感をふるった。アステカ時代にテスカトリポカは王家の祭神であって、その祭儀は支配者層によって施行され、またその職能は代々、世襲的に受け継がれていたであろうと推定されている。

他方、オルメカも紀元前1200年ころには、すでに政治、社会の制度も整い、部族国家的レベルから脱却して、階層化された王国の域に達しており、ジャガー神の祭祀も王家の宗教祭祀にとり入れられて、王の支配や権威の象徴となっていたであろうと説かれている。

ラ・ベンタの遺跡には未発掘ながら巨大なピラミッドが残されている。このような建造物をたてるには、政治的にも社会的にも相当の統率力と組織力とを必要としたにちがいない。このほかオルメカ地域に属する各地の遺跡からは、支配者層の出自を伝える獣祖神話的なテーマを主題とした石彫や記念碑、また人獣相婚像なども発見されており (狩野 1980, p. 382 図版Ⅳ)、これらを総合して考えると、あるいは Coe の意見も当を得ているかもしれない。

いずれにしても、オルメカの三種の器物は、太陽、火、水、トウモロコシをあらわすシンボルであり、マヤの三つ組のシンボルともよく符合する。斧と鏡は焼畑農耕の儀式にあたって、実際に用いられたと考えられる。ヒスイの珠は本来、水のシンボルであるが、土着民の習俗から考えて、トウモロコシのシンボルとしても差し支えないであろう。

当初は素朴な形で出発した焼畑の儀式も、オルメカの文化の発展とともに、やがては盛大な猫神儀礼の組織のなかに組みこまれ、もとは実用品であった器物も支配者の権威を象徴する宝器として尊崇されるに至ったものと思われる。

結 論

本稿では、ラ・ベンタ遺跡の特殊遺構から出土した斧、鏡、玉の資料をとりあげて、それらの特別な組み合わせについて考察した。その際、マヤ、アステカその他に関する資料や、クロニスタの記録を参照しながら、古代のメソアメリカに於て、それらの器物が人々からどのように扱われ、考えられていたかということに言及し、またそれらのシンボルとしての意味や機能についても追求し

た。また斧と鏡については、実用面にも触れ、それらが焼畑農耕の儀式として用いられた可能性のあることを指摘した。その結果、三種の器物は、古代の焼畑農耕の儀式と密接に関連し、それぞれ固有の意義を有しながらも、全体として一つのまとまった神格あるいは宝器という観念を与えられ、オルメカ文化の支配者層の権威の象徴として機能していた可能性のあることが判明した。

他方、斧神の系譜をたどる過程で一つの疑問が生じた。斧神については、オルメカとマヤとは実に緊密な関係にあって、オルメカのジャガー神は、仮りにマヤとは神の動物相は異なるにしても、その特性、すなわち二元性と四面性の具有、斧による象徴、三つ組のシンボル、焼畑儀式の主役などの点から、そのままマヤのB神に直結し、さらにその後のチャク神へと継承されている。

一方、中央高原地帯のテオティワカンやアステカ、またオアハカ地方のサポテカに於ては斧神＝雷神は存在するものの、いずれもマヤにくらべると、斧との関係は顕著ではない。トラロックについても、通説ほどには斧との結びつきはなく、イコノグラフィーの面ではわずかにアステカの資料に若干あらわれているにすぎない。それも専ら武器として使用されているという印象を受ける。その点でオルメカとの関連性は稀薄である。

斧をめぐる神々の相違は何に起因するのであろうか。直接考えられることは、自然環境と農耕法の相違であろう。オルメカとマヤとは熱帯の密林地帯に拠点をおくのに対し、テオティワカン、アステカ、サポテカは、いずれも水利のよい高原盆地や湖沼地帯に発祥している。マヤについては最近、焼畑のほかにも種々の耕作法があったことが判明しつつあるが、主体はやはり焼畑であったと考えられる。オルメカの場合、はっきりつかめていないけれども、大量の斧の生産は焼畑農耕の存在を暗示している。

メキシコ中央高原地帯やオアハカ地方では早くから灌漑農耕が進み、アステカではチナンパス農法がとられていた。斧神の系譜にちがいがみられるのは、基本的には農耕法の相違に原因があったと推測される。今後はこの方面の研究にも目を向けることが必要であろう。

註

- 1) 原田博士は中国でも「硬玉はその色彩が鳥類の羽に類似するところから俗に翡翠石と呼ばれている」と指摘されている(原田淑人著「玉類」p.124)。このことは古代メキシコ人と中国人との間で、類推の仕方に共通性のあることを証するもので興味深い。
- 2) たとえば、アトリワヤの像は、これまで一般にジャガーの毛皮を身にまとった神官像または戦士像とされていたが、頭部や歯、手脚、尾の形からワニのものであることがわかるし、また他のジャガー像においても、先端が二つに分岐しているのは、ヘビの舌の特徴を強調したものであり、さらに通称、ジャガーの“火炎型の眉”もワニの臉の箇所にある結節を様式化したもの、という説が有力視されるようになってきている。
- 3) Marcusによると、コシーホは、もともと雨神ではなく雷神であったとされる。その理由は、サポテカ族は祈禱に際して、よく神に向かってピタオ・コシーホ(Pitao Cocijo)と呼びかけており、この言葉は正確には稲妻のもつ偉大な霊力もしくは息とか風の意味であるのだが、16世紀のスペイン人が誤って「雨の神」と訳したのが、そのまま後代へ伝えられてしまった。したがって本来は稲妻とか雷とするのが正しいとされる。マヤの場合も事情は同じで、チャクは雨神ではなく雷神であると主張している(Flannery and

Marcus (ed.) 1983, p.38; Marcus 1978, p.181, footnote 1)

- 4) Landa (1941, p.97) は土着民は1月の中旬から4月にかけて、焼畑の作業に従事し、雨期になると種を播くと記している。現在でも状況はほぼ同じであるので、もう少し詳しく説明すると、12月から1月ごろ乾季がはじまると、斧（今は金属製の刀）で樹木を伐り倒し、しばらくの期間は乾燥させて、3、4月ごろにそれを焼く。そして5～6月に黒焦げになった木の切り株の間に種を播く。雨季は7～8月ごろやってくる。

参考並びに引用文献

Brotherston, G.

1979 *Image of the New World, The American continent portrayed in native texts.* Thames and Hudson, London.

Brundage, B. C.

1979 *The Fifth Sun, Aztec Gods, Aztec World.* University of Texas Press, Austin.

Coe, M. D.

1972 Olmec Jaguars and Olmec Kings. In *the Cult of the Feline* (Elizabeth P. Benson ed.), pp. 1-18. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D. C.

Codex Dresdeniensis

1932 *A Pre-Columbian Maya Codex in the National Museum of Archaeology,* Madrid.

Codex Tro-Cortesianus (Codex Madrid)

1968 *Reproduction of the Original Codex in the Museo de America,* Madrid. Graz.

Covarrubias, M.

1957 *Indian Art of Mexico and Central America.* New York.

Drucker, Ph.

1952 La Venta, Tabasco: a Study of Olmec Ceramics and Art. *Bureau of American Ethnology,* Bulletin 153. Washington.

Drucker, Ph., R. F. Heizer and R. Squier

1959 Excavations at La Venta, Tabasco, 1955. *Bureau of American Ethnology,* Bulletin 170. Washington.

Flannery, K. V. and J. Marcus (ed.)

1983 *The Cloud People Divergent Evolution of the Zapotec and Mixtec Civilizations.* Academic Press, New York.

Foshag, W. F.

1954 Estudios mineralógicos sobre el jade de Guatemala. *Anthropología e Historia de Guatemala* Vol. 6, pp.3-47, Guatemala.

Foshag, W. F., and R. Leslie

1955 Jadeite from Manzanal. Guatemala. *American Antiquity* Vol. 21, pp.81-82.

Grove, D. C.

1974 The highland Olmec manifestation: A consideration of what it is and isn't. In *Mesoamerican archaeology: New approaches,* edited by N. Hammond. Austin.

Hammond, N., A. Aspinall, S. Feather, J. Hazelden, T. Gazard, and S. Agrell

1977 Maya jade: Source location and analysis. In *Exchange systems in prehistory.* pp.35-67, Academic Press, New York.

Hammond, N.

1982 *Ancient Maya Civilization*. Cambridge University Press, New Jersey.

原田淑人

1968 「玉類」大場, 内藤, 八幡監修『新版考古学講座 1, 通論上』pp.119-133. 雄山閣

Joralemon, P. D.

1971 A Study of Olmec Iconography. *Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology*, No. 7. Dumbarton Oaks, Washington.

Joyce, T. A.

1970 (1914) *Mexican Archaeology*. Reprinted by Hacker Art Books, New York.

狩野千秋

1980 「新大陸の猫神儀礼とシャーマニズム」『民族学研究』Vol. 44-4, pp. 366-392. 東京

1982 「新大陸の鏡」『考古学研究室研究紀要』第1号, pp.167-198, 東京大学文学部考古学研究室

1983 「メソアメリカに於けるシンボルの諸体系」『考古学研究室研究紀要』第2号, pp. 229-273, 東京大学文学部考古学研究室

Kidder, AV., J. D. Jennings and E. M. Shook

1946 Excavation at Kaminaljuyú, Guatemala. *Publication 561 Carnegie Institution of Washington*, Washington, D. C.

Kubler, G.

1969 Studies in Classic Maya Iconography. *Memoirs of the Connecticut Academy and Science*, Vol. 18. Connecticut.

Landa, D. de

1941 Landa's relación de las Cosas de Yucatan. Tr. and ed. with notes by A. M. Tozzer. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University*, Vol. 18, Cambridge, Massachusetts.

Libby, W. F.

1952 *Radiocarbon Dating*. University of Chicago Press, Chicago.

Maler, T.

1901-03 Researches in the Central Portion of the Usumatsintla Valley. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University*, Vol. 2. Cambridge, Massachusetts.

Marcus, J.

1978 Archaeology and Religion: A Comparison of the Zapotec and Maya. *World Archaeology*, Vol. 10, No. 2, pp.172-191, The Camelot Press, Southampton.

Maudslay, A. P.

1889-1902 *Biologia Centrali-Americana, Archaeology*. Text and 4 Vols. plates. London.

Porter Weaver, M.

1981 *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors: Archaeology of Mesoamerica*. Academic Press, New York.

Proskouriakoff, T.

1975 Jades from the Cenote of Sacrifice at Chichen Itza, Yucatan, Mexico. *Memoirs of the Peabody Museum, Harvard University*. Vol.10, No. 1, Cambridge, Massachusetts.

Rands, R. L.

1955 Some Manifestations of Water in Mesoamerican Art. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 157, pp. 265-393. Washington.

- 1965 Jades of the Maya lowlands. *Handbook of Middle American Indians*, Vol. 3, pp. 561-580. University of Texas Press. Austin.
- Sahagun, B. DE
1950-63 Florentine Codex: General History of the things of New Spain. *Monographs of the American Research*, no. 14, Santa Fe, Mexico.
- Schellhas, P.
1904 Representation of deities of the Maya manuscripts. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University*, Vol. 4, No. 1. pp. 7-47. Cambridge, Massachusetts.
- Seler, E.
1915 Beobachtungen und Studien in den Ruinen von Palenque. *Abhandlungen der Königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften*. No. 5, Berlin.
- Shook, E. M., and A. V. Kidder
1952 Mound E-III-3, Kaminaljuyú, Guatemala. *Contribution 53, Carnegie Institution of Washington*, Washington, D. C.
- Spinden, H. J.
1913 A Study of Maya Art. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University*, Vol. 6. Cambridge (reprinted 1957 as *Maya Art and Civilization*, Part I. Indian Hills, Colorado.)
- Stirling, M. W.
1964 The Olmecs, Artists in Jade. In *Essays in Pre-Columbian Art and Archaeology*, pp. 43-59, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- Stocker, T., S. Meltzoff and S. Armeý
1980 Crocodilians and Olmecs: Further Interpretations in Formative Period Iconography. *American Antiquity*, Vol. 45, pp. 740-758.
- Thompson, J. E.
1970 *Maya history and religion*. University of Oklahoma Press, Norman, Oklahoma.
1971 (1960) *Maya Hieroglyphic Writing*, (3rd. ed.). University of Oklahoma Press, Norman, Oklahoma.
- Vaillant, G. C.
1930 Excavations at Zacatenco. *American Museum of Natural History, Anthropological Papers*, Vol. 32, pt. 1, pp. 1-197, New York.
1931 Excavations at Ticomán. *American Museum of Natural History, Anthropological Papers*, Vol. 32, pt. 2, pp. 199-439, New York.
1935 Excavations at El Arbolillo. *American Museum of Natural History, Anthropological Papers*, Vol. 35, pt. 2, pp. 137-279, New York.
- Vaillant, G. C., and S. B. Vaillant
1934 Excavations at Gualupita. *American Museum of Natural History Anthropological Papers*, Vol. 35, pt. 1, pp. 1-135. New York.
- Willey, G. R.
1972 The Artifacts of Altar de Sacrificios. *Papers of the Peabody Museum, of Archaeology and Ethnology, Harvard University*, vol. 64, no. 1, Cambridge, Massachusetts.
1978 Excavations at Seibal, Department of Peten, Guatemala. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University*, Vol. 14, no. 1, Cambridge, Massachusetts.

斧・鏡・玉

Willey, G. R., W. R. Bullard, Jr., J. B. Glass, and J. C. Gifford

1965 Prehistoric Maya Settlements in the Belize Valley. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University*, vol. 54, Cambridge, Massachusetts.

Celt, Mirror, and Jade

A Study of the Three Sacred Objects of the Olmecs

Chiaki Kano

La Venta site was an important ceremonial center of the Olmec culture, but with the advance of oil exploitation enterprises, excavation was interrupted, leaving us with many unsolved problems.

In this paper, I investigate the mosaic pavement structures and the special buried offerings that have attracted the most attention concerning this site and point out that there is a close relationship between the two. Among the material excavated, I have dealt in particular with three sacred objects, i. e., the celt, the mirror, and the jade, and I have examined the significance and function of each.

The mosaic pavement structures consist of several hundred serpentine blocks arranged to express a conventionalized jaguar head. One structure is on the south side of the ceremonial court; the other two are laid out symmetrically on the eastern and western sides of the ceremonial court.

The buried offerings are celts of jade and serpentine laid out in a cruciform pattern; they are accompanied by a large number of mirrors and jade beads.

The mosaic pavement structures and the offerings are buried in two layers, on top of each other, which implies that there is a close relationship between them. The mosaic pavement structure, which is the bottom layer, depicts a jaguar god, and the cross-shaped arrangement of celts in the top layer expresses the attributes of this god, that is, his power to control the cardinal points of the universe. It is my judgment that the celts, mirrors, and jades symbolize the attributes of this god.

For the Mayas and the Aztecs as well, jade was greatly valued and was considered a divine object superior to gold and silver. It was also used as currency and as provision for dead people in the next world. It was also considered the same as corn and as the blood of human sacrifices. It was also a symbol of rain and water. It is known that the natives of Brazil and the hinterlands of the Amazon used small jade celts as amulets to cure kidney diseases.

The Olmecs also engraved images of gods on jade celts; it is thought that their inclusion

of jade in graves and special offerings comes in principle from the same concepts and customs as the Mayas's and the Aztecs's.

The celts of the Olmecs are distributed over a wide area. Among them are some with complex iconography, but the principal motifs are of two kinds: feline and reptilian. Images of gods are mainly composed of combinations of distinctive elements of these two categories of creatures. Also, they are drawn with U and X shapes, and they seem to symbolize dualistic concepts such as fire and water, sun and moon, east and west, heaven and earth, day and night, man and woman, life and death, etc. However, these dualistic elements are not seen as opposing concepts existing separately but as integrated into a single god. The concept of a single god endowed with duality can be seen, for example, in the fact that the two symbols, the patterns U and X are used together in a single jaguar face. In this case, the main god is the Jaguar.

Besides its duality, the Olmec jaguar god seems to have had four aspects. This supposition is supported by the fact that in the Las Limas figure, a god with four separate faces is carved on one statue. As with the gods of other periods in Mesoamerica, it can be surmised that these four functions corresponded to the four world directions, that is, east, west, north, and south, and to four colors, that is, red, black, white, and yellow. This also corresponds to the symbolism of the above-mentioned cruciform pattern of the buried offerings. In short, the Olmec jaguar god was a dualistic divinity and seems to have been regarded as having four aspects and as being omnipresent throughout the universe. Furthermore, it can be concluded that its divinity was symbolized by the celt.

In the old world, the celt was worshiped as the God of the Thunderbolt; it was the symbol of fire and water. In Mesoamerica also, the Tlaloc of Teotihuacan, the Chac of Maya, and the Cocijo of Zapoteca were all gods of the thunderbolt, and their divinity was symbolized by celts and lightning. However, among these, Chac was the god with the closest connection with the celt.

In the post-Classic period of the Maya, Chac was worshiped as the god of slash-and-burn agriculture, and his ritual was carried out as the Burner ritual. In this ritual, trees were burnt in preparation for sowing corn. The fact that even now celts are often discovered in the old fields indicates that celts were used to cut down trees during this ritual.

The main characteristic of representations of Chac is the long elephant-like nose. The prototype of this god already existed in the Classic period; it is called God B or the long-nosed god, and it was often carved in reliefs in palaces and graves. It is also represented as the small figure of the ceremonial staff called the Manikin Scepter. This god also had

a connection with the Burner ritual. The main characteristics of representations are again its long nose and its depiction with a celt embedded in part of its forehead.

In the case of the Olmecs, it is thought that jade and serpentine celts were reserved for ceremonial use and not for practical use, but there are some celts with marks of use. It is my conclusion that they were used for the ritualistic cutting of trees during ceremonies. Perhaps the fact that they are depicted in the form of a celt driven into the forehead of God B makes them a symbolic representation of this kind of ceremony. It can be surmised that if the Olmecs practised the Burner ritual, they would have actually cut the trees with celts of harder stone and started fires with mirrors using solar heat.

When considering the significance and the function of the set of the three divine objects, celt, mirror, and jade, the "Triadic symbol" of the Mayas is a good guide. This is a mark made up of three signs: crossed bands, shells, and leaf-shaped designs. Kubler considers that the crossed bands represent fire, the shells fire-making, and the leaves corn leaves, and he concludes that this mark is often found combined with representation of God B, it is a symbol connected with the ceremonies of slash-and-burn cultivation and that it is an insignia of authority of the Maya ruling class.

There is another important symbol accompanying this triadic symbol. This is the Kin sign representing the sun. Consequently, it is not, strictly speaking, a triadic symbol but a quadruplet one, and the Olmec symbol fully corresponds with this Maya symbol. Although it consists of the three elements of celt, mirror, and jade, I conclude that it is a symbol made up of four elements; i. e., the celt symbolizes fire and water, jade symbolizes corn, and the mirror symbolizes the sun. At the same time as it is a symbol of the divinity of the jaguar god, it implies the slash-and-burn ritual.

The slash-and-burn ritual was initially carried out in a very primitive form, but with the development of Olmec culture, it seems that it was incorporated into the large-scale feline cult system, and the three divine objects of celt, mirror, and jade were valued highly as symbols of the authority of the rulers.

One final problem remains. While a close relationship between both the Olmec jaguar god and the Maya god B on the one hand and the celt on the other is recognized, the connection between the Tlaloc and Cocijó and the celt is not prominent in their representations. Further study is required to establish whether or not the reason is to be found in the natural environment and the agricultural systems that fostered the culture.